

研究ノート

貨幣と時の矢

—システム論による貨幣の哲学をめざして〔1〕—

春日 淳 一

要 約

市場経済においては、貨幣を支払えば原則としていつでも誰でも望む商品を手にすることができる（コミュニケーション・メディアとしての貨幣の一般化）。しかし、いったん購入した商品を返品して支払った貨幣を取り戻すことは通常できない。貨幣支払いのこの不可逆性はそれ自体なら目新しい事実ではないが、本稿では(1)貨幣支払いとその不可逆性を社会システム論の文脈でとらえたうえで、(2)物理学的なイメージをも借りて、支払いの不可逆性が経済システムにおける時間の一方向性と結びついていることを示し、最後に(3)不可逆性の文明論的帰結を述べる。出発点となるのは、ルーマンが経済システムの基本的出来事（システム要素としてのコミュニケーション）とみなした支払い／非支払いという対概念である。ルーマンは支払いと非支払いの対称性を強調するが、両者には意思決定を伴うか否かをめぐって「対称性の破れ」が見られる。筆者は出来事／反出来事という対概念を用いて非支払いを2種に区別したのち、支払いと同時に生じる反出来事としての非支払いに着目し、それが支払いの不可逆性発生の「現場」となる様子を明らかにする。

キーワード：支払い／非支払い；出来事／反出来事；貨幣の可塑性；不可逆性；時の矢；社会的時間；加速危機
 経済学文献季報分類番号：01-13；02-11；12-10

0. はじめに

貨幣はさまざまな側面で時間とかかわりをもつ。筆者はすでに、貨幣が経済システムにおいて時間の資源化と時差の架橋というふたつの機能を担っていることを論じたが（春日 [5]、第6章）、貨幣と時間の関係を観察する視点はこれに尽きるものではない。本稿は、時間の方向性というもうひとつの視点をつけ加えることで、体系的な「貨幣の時間論」へ向けてさらに歩を進めようとするところみである。前稿と同様、ルーマンの社会システム論に手がかりを得つつ、かなり自由に議論を展開していく。副題に「システム論による貨幣の哲学をめざして」とつけたのは、ルーマンの経済論（[10]）の核心部分がじつは貨幣の哲学にほかならず、これを敷衍すればシステム論のことばで書かれた（ジンメルのものに比すべき）独自の貨幣哲学に仕立てることができ、貨幣の時間論はその一部をなすはずだと考えたからである。このもくろみの成否はさておき、まずは社会システムに時間軸をはめ込む「出来事」という基礎概念からスタートしよう。1937.

1. 出来事と時間

社会システムは、その基底的要素が生まれるそばから消えていく瞬間的なものである限りにおいて、「自らを構成する要素を自ら再生産する」オートポイエティック・システムととらえられる。要素がある一時点にのみ結びつき持続性をもたないとき、システムが消滅してしまわないためには要素は絶えず新たな要素を生み出さざるをえず、システムにとって自律への強制(Zwang zur Autonomie)がはたらき、作動はオートポイエティックになるのである(Luhmann [9], S.28-29(訳, 16ページ))。ルーマンは、要素をこのように束の間のものとしてとらえることを「要素の時点化」(Temporalisierung der Elemente)、時点化された要素を「出来事」(Ereignis)とそれぞれ呼んでいる。社会システムの時点化された要素つまり出来事はコミュニケーションであり、コミュニケーションは自ら次々と新たなコミュニケーションを生み出していく能力つまり接続能力(Anschlußfähigkeit)をもつと同時に、システムの構造によって接続のあり方を規定される(Luhmann [9], S.388(訳, 536ページ))。会話を例にとろう。会話はルーマンに従えば社会システムの一類型である相互作用とみなしうるが¹⁾、会話のシステムが維持されるためには会話が途切れずに続くとともに、話に脈絡がなくてはならない。参加者のひとりが何か言ったあと、誰も何も言わなければ会話は成り立たないが、かといって次に誰が何を言ってもよいというわけでもない。しかるべき人がしかるべきことを言っはじめて意味のある会話となる。この「しかるべき」か否かを区別するものが構造にほかならない。つまり「システムの構造の核心は、…そのシステムにおいて許容される諸関係〔出来事の接続のあり方〕を限定することに存している」のである(Luhmann [9], S.384(訳, 530ページ)。〔 〕内は引用者による補足)。

「出来事」は瞬間的で時間幅をもたないため、「どんな出来事でも、現在という性質を次の出来事に譲り渡しており、この次の出来事からすると(つまり、当の出来事の未来からすると)、当の出来事は過去の出来事になる」(Luhmann[9], S.390(訳, 537-538ページ))。言いかえるなら、出来事が次々と繰り出される(=接続していく)ことで時間の流れが顕在化するものであり、出来事の瞬間性がシステムに時間性を与えるという一見逆説的な関係が見られる。筆者はこの事実を比喩的に、「出来事はシステムにとっての時計である」と表現したい。なぜなら、時計の針はある一瞬だけ文字盤上のある位置を指すが、次の瞬間には別の位置を指すことによって時間の経過を教えるからである(針がずっと同じ位置に止まっていたら時間が計れない!)²⁾。

2. 出来事としての支払い・非支払い

ここで話を経済システムに転じよう。経済システムは全体社会システムの機能的に分化した下位システムであり、その要素は「支払い」というコミュニケーションである。したがって経済システムの存続は、束の間の出来事としての支払いが自らを途切れることなく再生産していくか否かにかかっている。ところがルーマンによれば、「たんに支払いだけが問題なのではなく、非支払いもまた

重要である…。車が高価になりすぎたので新車を買わないという決断もまた、経済システムにおける基本的出来事なのである」(Luhmann[10], S.53(訳, 42ページ))³⁾。基本的出来事であれば当然コミュニケーションであるということになるが、非支払いはいかなる意味でコミュニケーションなのだろうか。「〔非支払いが経済システムの〕基本的出来事と認められるために必要なのは、一基本的出来事であるかないかの境界設定は、不作為にかんする回りくどい論議から分かるように、やっかいな問題をひき起こすのだが一支支払いが、願望としてか予期としてか義務としてか、とにかくなんらかの形で心にまず浮かんではいたのだが、にもかかわらず行なわれないままであるという事実である」([10], S.53(訳, 42ページ)。〔 〕内は引用者による補足)。このように説明されても、「理由はともあれ、支払われないのだから受取人がいないわけで、そもそもコミュニケーションは生まれないのではないか」との疑問は拭えない。

たしかにルーマンの説明は読み手にとって十分なものとはいいがたい。しかし、彼の理論にある程度なじんだ者なら、自分なりに補って読むことは可能である。筆者は非支払いを自己とのコミュニケーションと解釈したい。支払いを中止してその額だけ自分で受け取ったと考えてもよい。つまり、自己を支払い相手とする再帰的コミュニケーションを含めることで、ルーマンのあげているような非支払いのケースは経済システムの出来事という資格を得るのである。もちろん、すべてのコミュニケーションが再帰的なものであれば、経済システムは外部観察者の目には作動を停止している、あるいは空転している、と映るだろう。しかし、だからといって再帰的コミュニケーションを経済システムの作動の阻害因とみるのは正しくない。再帰的コミュニケーションは支払いの前の熟慮・再考プロセスであり、次になされる支払いにとっていわば予熱 (Vorheizung) を意味するものなのである。経済システムにおいては、「予熱」によって呼び起こされた支払いや「予熱」を伴わない支払い (たとえば、ルーティン化した支払いや「衝動買い」) が入り交じって、全体としては非再帰的なコミュニケーションつまり他者への支払いが絶えず生み出されている (=作動が継続する) と考えてよいだろう。

ルーマンによれば、「支払いが、願望としてか予期としてか義務としてか、とにかくなんらかの形で心にまず浮かんではいたのだが、にもかかわらず行なわれないままである」とき、この非支払いは経済システムの基本的出来事となるのだが、一方で彼はこうも言っている。すなわち、「行為が自らに向けられた予期に反応するばあいにはつねにその行為を意思決定とみなせ。……そのさい他者の予期が問題であっても、行為者自身の自己予期が問題であってもよい」([10], S.278(訳, 285ページ))。とすれば、ある者の非支払いはそれが当の者の意思決定を含意するならば経済システムの基本的出来事となり、さもなければ基本的出来事ではない、ということになるだろう⁴⁾。

3. 支払い・非支払いの対称性とその破れ

「非支払いもまた経済システムの基本的出来事である」という意表をつく言明にひとまず「けり」をつけたのだが、ルーマンはなおもむずかしい謎をかけてくる。先の引用部分に続いて彼はこう述

べる。すなわち、「支払いと非支払いは、ひとつの図式論によって結び合わされた出来事であり、一方は否定を経由してつねに他方を意味的に包含する。支払う者はまさにそのことで彼の貨幣を手元にとどめておけないし、とどめておく者は支払えないというわけで、つねに反対方向への同時指向がついてまわる。……基底的作動のレベルでの〔経済〕システムの自己準拠は、そのつど必要でそのつど同時決定を余儀なくされる、反対物の否定を通じて媒介される」([10], S.53-54(訳, 42-43ページ)。〔 〕内は引用者による補足)。

このくだりを素直に読めば要するに、ある者が支払う(たとえば新車を購入する)と決めるなら、その意思決定は支払わない(新車を購入しない)という意思決定の否定を意味する(逆のばあいは逆)ということであろう。「そのつど同時決定を余儀なくされる反対物の否定」とあるから、ルーマンは非支払いの意思決定の否定はやはり意思決定と考えているようである。支払いの意思決定と、非支払いの意思決定の否定としての意思決定、この両者が同時に行なわれるわけである。しかし、同じ者が複数の意思決定を同時になしうという考え方には無理があるのではなかろうか。筆者のみるところ、そうした無理はルーマンが支払いと非支払いに付与した過度の対称性から生じている。たしかに支払いはすべて意思決定を含意しているかもしれないが⁴⁾、非支払いは必ずしも意思決定を伴っていない(したがって非支払いは必ずしも出来事ではない)。この「対称性の破れ」にこそ十分な注意が払われるべきなのである。そこで少し視点を変えて支払いの場面を眺めてみよう。

いま、Aがなにがしかの貨幣をBに支払ったとすれば、Bにはその分だけ支払い可能性という自由が与えられるが、Aは同じだけ支払い可能性つまり自由を失う。言いかえると、AはもしBに支払わなかったらできたはずの支払いを断念せねばならない。支払いの断念は非支払いにほかならないから、AのBへの支払いは同じくAの可能な代替の使途への非支払いと背中合わせになっている。支払いがなされるたびに同額の非支払いが同時発生している、と言ってもよい。AからAへの再帰的な支払いも支払いの仲間に加えるならば、(意思決定を伴う=出来事としての)非支払いがなされるたびに同額の支払いが同時発生している、という逆の表現も成り立つ。このように考えると、ひとつの疑問が浮かび上がってくる。それは(1)AからBへの支払いと背中合わせになっているAの非支払い、あるいは逆に(2)Aの非支払いと背中合わせになっているAからAへの再帰的な支払いは、はたして「経済システムの基本的出来事」なのか、という疑問である。

まず(1)のケースをとりあげよう。たとえば、ディーラーに支払う新車購入代金が家屋修繕費支出の断念によって捻出されるとすれば、この非支払い(家屋修繕の断念=意思決定)は支払い(新車購入)とともに明らかに基本的出来事のカテゴリーに含まれる。ところが、いま問題にしているAの非支払いはAからBへの支払いと同時に発生するのであるから、この例ではAは修繕断念の意思決定と新車購入の意思決定を同時にしていることになる。しかし、ルーマンに従って意思決定を出来事、つまり自己の寿命をもたない時点化したシステム要素、ととらえるならば([10], S.282(訳, 288ページ))⁵⁾、同一人が複数の意思決定を同時に行なうことは不可能である。Aは家屋の修繕を断念したうえで新車を購入するか、新車を購入してしまったので家屋の修繕を断念するか、いずれに

せよ意思決定（＝出来事）を時間的に接続させるしかない。こうして「AからBへの支払いと同時に発生するAの非支払い」は意思決定を含まない「出来事にあらざる非支払い」となる。Bへの支払いの瞬間には、Aの意思とは無関係にただ未確定な用途への支払い可能性が消滅するだけなのである。

次に(2)のケースであるが、話の筋からしてここでのAの非支払いは意思決定を伴う「出来事としての非支払い」である。そのさい同時発生するAからAへの再帰的な支払いは、この非支払いをコミュニケーションとみなすために仮想された支払いであり、非支払いの意思決定とは異なる独自の意思決定を伴うものではない。要するに、特定の非支払いによって当該額だけ用途未確定な支払い可能性がAの手元に残るということである。本ケースにおける非支払いと支払いはいわば同じ出来事の別名であり、異なる出来事が同時に発生するわけではない。あえて言うなら、AからAへの再帰的な支払いはそれ自体としては出来事ではない。

「非支払い」にかんしてルーマンが仕掛けた「謎」をなんとか解きほぐすことができたようである。肝心なのは(a)「支払い」（再帰的な支払いは除く）と「非支払い」は完全に対称ではなく、前者はすべて意思決定を伴う「出来事」であるのに対し、後者には意思決定を伴うもの（＝出来事）と伴わないものがあるということ、そして(b)同時性を強調するなら、支払いの意思決定と同時に非支払いの否定としての意思決定がなされるのではなく、支払いと同時に意思決定を伴わない非支払いが生じるととらえるべきこと、この2点である。

次節からは、以上の考察をより一般化する方向で、ルーマン理論の枠にしばられずに議論を展開してみたい。

4. 「不活動」について

支払いのみならず非支払いにもコミュニケーション上の意味を見いだしたことでルーマンはG. ベイトソンの立場に近づいている。ベイトソンは『精神の生態学』において、コミュニケーションの世界では力や衝撃ではなく差異がイフェクトを生むとして次のように言う。「精神の中では、無一すなわち存在しないものも出来事を引き起こす原因になりうる…。…心の世界、コミュニケーションの世界では、ゼロもイチとの間に差異を持つという理由によって、原因になりうるのです。書かない手紙に対して怒りの返事が来ることがあります。提出しなかった納税申告書が引き金となって、税務署の面々がエネルギーギッシュな行動を起こすことがあります」(Bateson[2], 訳, 652ページ)。

手紙を書かないことや申告書を出さないことは支払わないことと並んで「不活動」の例となるが、不活動には上で非支払いについてみたように意思決定を伴うものと伴わぬものがある。手紙のばあいであれば、意図的に書かないのか、そもそも書くことに思い至らない（失念している）のかの違いである。不活動がいずれの種類であるかによって、あとに続くコミュニケーションの様態が異なってくる。わざと手紙を書かないのであれば早晚コミュニケーションの断絶を招くだろうが、失念

のばあいにはお詫びの手紙によって友好的なコミュニケーションが復活するかもしれない。非支払いについても、たとえば税金の不払いを例にとることでコミュニケーション様態の違いが浮かび上がるだろう。つまり、脱税なのかたんなる払い忘れなのかで税務署とのコミュニケーション、あるいは経済システム内的コミュニケーションである支払いそのもの、の様態が変わってくるのである。とはいえ、意思決定を伴わない不活動の領域は無限に広がっており、すべてを視界に入れることは可能でも有意味でもない。たとえば、われわれが実際に支払う対象は商品に限ってみても全商品のごく一部であり、大部分の商品にかんしてはその存在さえ知らず、ましてやそれらへの非支払いは意識にもよらない。それゆえさしあたりは、経済システムにおける不活動つまり非支払いのうち、意思決定を伴う非支払いと、支払い（これはすべて意思決定を伴う）と同時に生じる意思決定を伴わない非支払いのふたつだけをとりあげることにしよう。ただし、以下で経済システムについて語る内容は他の社会システムへ一般化できると筆者は考えており、「支払い／非支払い」という表現は適宜それぞれの社会システムの基本作動（基本的出来事）に読み替えられることを予定している。

5. 出来事・反出来事

先の引用からも読み取れるように、ルーマンの関心は意思決定を伴う非支払いにあり、支払いと同時に生じる意思決定を伴わない非支払いへの言及はない。しかし、われわれはむしろ後者の非支払いに注目したい。この「支払いと背中合わせの非支払い」は、人物や動物の形を切り抜く切紙絵になぞらえることができる。切り抜く前の紙には何の形も見えないからこれを「無」(Nichts)の状態としよう。ところが切り抜いてしまうと、もとの紙は人物や動物の形をした紙と、その形が抜け落ちたあとの穴のあいた紙とに分かれる。人物や動物の形をしたほうの紙をポジとすれば、穴のあいたほうの紙はネガである。ただ写真と違うのはポジとネガが同時に生まれることである。これを支払いに置き換えるなら、たとえば新車を買って「支払う」という出来事が起こる瞬間に、新車の代金に相当する額だけ他の用途への支払い可能性が失われるが、この「支払い」と「支払い可能性の喪失」は、ちょうどポジとネガの関係にあると言えるだろう。そこで、ポジとしての「支払い」を「出来事」と呼ぶのに対して、ネガの「支払い可能性の喪失」ないし「非支払い」を「反出来事」(inverses Ereignis)と名づけることにしよう。話の筋から明らかのように「反出来事」は意思決定を伴っておらず、したがって「出来事」ではありえない。

物理学ではすべての粒子に対して反粒子が存在するとされ、物質を構成するすべての粒子を反粒子で置き換えた反物質というものも考えられている⁶⁾。いま問題にしている出来事と反出来事の関係は、この粒子と反粒子あるいは物質と反物質の関係に極めて近いと筆者は見ているが、もちろんここで物理学の最先端のテーマに取り組もうなどというのではない。結果的に同じ発想にもとづく分かるにせよ、とりあえずは経済システムを素材にして独自に議論を進めるべく切紙絵の比喻に戻ろう。経済システムにおける出来事は支払いであり、システムが存続する限り支払いは次々と支払いを生み出し続けるから、支払いという出来事が切り抜かれる原紙も尽きることなくロールから

次々と繰り出されねばならない。経済システムにおいてこの原紙にあたるものは貨幣である。貨幣は一時点をとれば量が限定されている（ある時点でロールから出ている紙幅は限られている）が、（あたかもエンドレス・テープを回すように）支払いにともなって繰り返し使われるから、時の経過を含んだフローとしては無尽蔵である⁹⁾。支払いの担い手である経済システムの参加システム（家計や企業）ないし組織のレベルで見ると、たとえば新車の購入は参加システムないし組織の意思決定を通じて貨幣メディアに形態を与えることにほかならない⁹⁾。形態は新車購入であつたり企業設備投資であつたり、はたまた喉の渇きを癒す飲料水購入であつたりするが、それらは物理的なかたちまたは記憶として残るのに対し、支払いのメディアである貨幣は設備投資にあてられようと新車や飲料水の購入にあてられようと、その用途や由来の痕跡を残さない。紀元1世紀にローマ皇帝ウェスパシアヌスが「臭いのない貨幣」(pecunia non olet)と表現したこの特性をジンメルももちろん見落としてはいない。「貨幣の匿名性と無色性とは、貨幣が現在の所有者に流れた源泉を認識不可能なものとする。貨幣は…、どれほど多くの具体的な所有対象と関係したかの由来証明をけって身につけない」(Simmel [17], S.424-425(訳 [総合篇], 173ページ))。

ある家計が新車を購入して代金をディーラーに支払うとしよう。切紙絵の比喻でいえば、その家計の手持ち貨幣額（ないし所得）に相当する紙幅をもつ原紙に購入代金分の大きさで（新車を表わす）特有の形をした穴があくこととなる。ところが次の瞬間には、これこそ貨幣の貨幣たるゆえんなのだが、穴は特有の形を失って消滅し、穴の面積分だけ原紙の丈が短くなる。一方、ディーラーが受け取った代金は当初（新車1台を表わす）特有の形をした紙片であるが、これもただちにディーラーの手持ち原紙の伸長分となって形を失う。いうまでもなく、家計の側で短くなった分だけディーラー側の原紙が伸びるから、全体としての原紙の長さ（エンドレス・テープの全長＝経済システム全体の貨幣総量）は変わらない。このばあい、家計の支払い（＝出来事）は新車（の到着）というかたちで物理的に（または記憶として）あとまで残るが、支払いと同時に生じた非支払い（＝反出来事）は形態を一瞬のうちに失うため跡づけることは不可能である。

今や切紙絵よりもクッキー作りのほうが適切なたとえになるだろう。生地からクッキー型で動物や星やその他もろもろのかたちを抜く。穴のあいた生地はそのつど次の型を抜きやすいように、いったん丸めてふたたび平たく伸される。伸された生地には穴はもはやないが、面積は前よりも小さくなっている。抜いた生地はオープンに並べられ、やがてクッキーが焼き上がる。ここで生地は貨幣（量）に、型を抜いてオープンに並べることは支払いに、焼き上がったクッキーは購入される商品に、それぞれ対応している。オープンは売りに擬されよう。ちなみにルーマンのいう「形態」は、焼き上がったクッキー＝購入される商品そのものではなく、クッキー型にあたる。各家庭が好みに合ったひと組のクッキー型を揃えているように、各組織は自らのリジッドな構造に規定された固有の形態のセットを備えているのである⁹⁾。

支払いは意思決定を伴うが、支払いと同時に生じる反出来事としての非支払いは意思決定を伴わないという点は、すでに繰り返し強調した。貨幣メディアにいかなる形態を与えるのか（生地にと

の型を抜くのか)は組織(クッキーの作り手)の意思決定にかかっているが、喪失した支払い可能性(生地にあいた穴)をめぐって同時になんらかの意思決定がなされるわけではない。この事実を一般化して、「出来事は形態を担いうるが、反出来事は担いえない」と表現しておこう。

6. 貨幣と時の矢

前節のクッキー作りの比喩は、貨幣に特有のいくつかの性質を浮き彫りにしてくれる。さまざまな形態を刻み込むことのできる「可塑性」はすぐに見て取れるが、もうひとつ重要なのは時間との関係である。クッキー生地からはいろいろなかたちのクッキーが焼けるのに対し、焼き上がったクッキーはもはや生地に戻せない。同様に、新車を買う金は他の商品の購入にも使えるが、ひとたび買ってしまった新車をもとのディーラーのところへ持ち込んでも(欠陥車でない限り)金を返してはくれない。どうしても換金したければ、中古車市場の売り手として買い手を探すしかない。貨幣支払いのもつこの不可逆性が他の種類のコミュニケーションについても確かめられるなら、「社会システムにおける(つまり、物理学や化学などいわゆるハード・サイエンスの対象ではない)出来事は不可逆性をもつ」と一般化できるだろう。そして出来事の不可逆性は、第1節でふれた出来事の瞬間性と合わせて、当のシステムに過去から未来への一方向の矢をもった時間軸をはめ込むことになろう。とはいえ、本稿では経済システムに焦点を合わせるべく、一般化のための確認作業にははまらないことにしたい。

メディアとしての貨幣は「可塑性」をもつとともに、出来事としての貨幣支払いは「不可逆性」をもっている。不可逆性があるからこそ、支払いという出来事は未来へ向かって次々と繰り出され(=接続し)、経済システムの存続を支えるのである。もし支払いが可逆的であれば、つまり支払いに伴う取引過程を撮影したフィルムを逆回ししたとき映る過程が実際にも可能であれば、経済システムが成り立ちえないことは明らかである。支払いの不可逆性ゆえに、「経済はまるでジェット推進原理に従っているかのように前へ前へと駆りたてられるのである」(Luhmann[10], S.137(訳, 135ページ))。

だがひとつ問題が残っている。はたして非支払いは可逆なのか不可逆なのか、という問題である。買うつもりにしていた新車の購入をとりやめるといった「意思決定を伴う非支払い」のばあい、その意思決定をくつがえして(否定して)購入することは可能である。この非支払いを自分で自分に支払う再帰的支払いとみなすなら、可逆性はいっそう見やすくなる。再帰的支払いでは商品が動いていないため、逆回しができるのである。では(通常的非再帰的な)支払いと同時に生じる「意思決定を伴わない、反出来事としての非支払い」のばあいはどうであろうか。一見すると、ここでも商品が動いていないから可逆だ、と言いたくなる。しかしそれでは、わざわざこの種の非支払いを区別する意味がなくなってしまう。はなはだ突飛と思われようが、筆者は次のように考えたい。すなわち、反出来事としての非支払いは不可逆であり、出来事としての支払いが未来へ向かって次々と繰り出されて(=接続して)いくのと裏腹に、過去へ向かう時の矢に沿っていわば支払いの陰画

として繰り出されるのだと。貨幣の「可塑性」ゆえに、この陰画は一瞬のうちに消えてしまい（形態の喪失）、われわれは（残念ながら？）時間の逆流を経験できない。前節の末尾で「出来事は形態を担いうるが、反出来事は担いえない」と表現した事態が、実は時の矢の逆転不可能性につながっていたのである。改めて一般化するなら、「反出来事は出来事よりも格段に早く消滅（崩壊）するため¹⁰、すなわち出来事に比べてほとんど痕跡を残さないで、われわれの社会では時間は過去から未来への一方向でのみ流れる」となる。

ここで、もし貨幣が可塑的でなかったらどうなるか、という思考実験をしてみよう。違いをきわだたせるには物々交換との対比が好都合である。いま、自分の所有する馬1頭と交換に新車を手に入ると想定しよう。ただしそのさい、馬を手放すという意味決定と新車を入手するという意思決定が別々になされるのであれば、正確な対比ができなくなる。この交換は貨幣支払いのケースと同じく、あくまで単一の意思決定によってもたらされねばならない。さて、支払いと同時に生じる「反出来事としての非支払い」はこのばあい、「馬1頭の欠落」として少なくともしばらくの間は記憶される。あるいは、新車に乗るたびに手放した馬のことが思い出される。一方、くだんの馬はといえば、かつて大切にしていた箆筒と交換したものだ。さらにその箆筒は……。かくして時は限りなく過去へと遡る。これらの取引をフィルムに記録しておいて逆回しするならば、逆プロセスも完全に実行可能なことが分かるはずである。新車と交換に馬を手に入れ、次いで馬と交換に箆筒を手に入れ、さらに箆筒と交換に……。貨幣支払いのばあいには逆プロセスは実行不能であるから¹¹、時間は前へ前へと進むしかないが、物々交換の世界では時の矢の逆転もありうるのである。

時間の逆転といっても過去へ戻るタイムマシンの話ではない。いま問題にしているのは社会システムにおける出来事であり、そこでは「社会的時間」を天文学上の時間と区別して導入することが可能であり、また必要でもある。社会学者なかでも経済学者の大多数は、社会的時間の矢を天文学上の時間のそれと同じく過去から未来へ向かう一方向と信じて疑わないようであるが、筆者はあえて社会的時間の逆転可能性に注意をうながしたい。

7. 支払いの不可逆性と「加速危機」

前節での検討から、支払い過程の不可逆性が貨幣メディアの可塑性（ルーマンの用語でいえば「象徴的な一般化」）を拠り所に行っていることが分かった。経済システムの枠をはずして一般化するなら、社会システムは自らの用いるコミュニケーション・メディアの可塑性を高めるにつれて、その作動（＝出来事）の不可逆性・一方向性を獲得し、自らを前へ前へと押し進める、と言えるだろう。もちろん、経済システム以外のシステムについての検討に着手していない今の段階ではこれは推測にとどまるが、そうした推測をも視野に入れたうえで不可逆性の文明論的帰結を示してとりあえず稿を閉じることしよう。

社会的時間の重要性を指摘したソローキンとマートンによれば、かつての社会的・質的で（つまり非天文学的で）ローカルな時間体系は、都市化・社会分化・コミュニケーション範囲の拡大など

によって次第に不便なものとなり、代わって天文学的で純粋に量的な時間体系が広く採用されるようになったのだが、社会の動態を分析するさいには今なお社会的時間概念は欠かせない、という(Sorokin and Merton [18])。社会の動態の一例として市場の拡大をとりあげよう。定期市(たとえば六斎市)が栄えた時代に、市の開催日を基準にして地域ごとに成立していた時間サイクル(六斎市であれば5日周期)は、全国市場やグローバル市場の時代には全く無用となる([18], pp.624-625)。今や、24時間オープン・年中無休・不眠といった標語に象徴される周期も切れ目もない様な時間の流れこそが市場の求めるものである。市場の拡大はほかならぬ社会的時間概念の変容をもたらしたと言えるだろう。ちなみに周期的に開かれる市場には、一方的な前進に身を任せずに自らをもとへ戻す(あるいは自らを反省する)仕組みが備わっている。そこでは、ある意味で時間の前進と逆転が交互に繰り返される。季節ごとに同じ時期には同じような種類の農作物を同じような量だけ並べる朝市のおばさんを思い浮かべてほしい。グローバル市場では農作物といえども季節的な周期とは無縁である。こちらになれば地球の反対側から持ってくればよいのである。

前節に登場した物々交換が周期性と結びついた興味深い例は、マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』に出てくる「クラ交換」である(Malinowski [13], とくに第3章)。クラは副次的に日用品の交易を伴うことがあるとはいえ、それ自体は腕輪と首飾りの儀礼的な交換の鎖であって、ふたつの品物が多く島の多数の部族を結ぶ環に沿って互いに反対方向に回っていく。物々交換として見れば、ある者Aの前後に交換相手B, Cがおり、AはBに自分の腕輪を渡し(支払い)お返しに首飾りをBから受け取る。Aの「支払い」と同時に生じる「反出来事としての非支払い」は「腕輪の欠落」であるが、この欠落は反対側にいるCとの交換、すなわちCの腕輪とAの首飾りの交換によって埋め合わされる。Cの腕輪はAがBに渡した腕輪とはさしあたり別物かもしれないが、2~10年もすればもとの腕輪が戻ってくる。こうして実質的に支払いの逆転が保証されるのである。あるいは、前へ前へと進んでいるかに見えるプロセスが実際にはもとへ戻る循環過程となるわけである。貨幣支払いとは対照的に、クラ交換では社会的時間の逆転つまり過去への遡及がいわば必須要素になっている。「貨幣は…、どれほど多くの具体的な所有対象と関係したかの由来証明をけっして身につけない」(Simmel [17], S.424-425(訳〔総合篇〕, 173ページ))のに対して、クラにおいては「うやうやしく彼〔原住民〕はそれら〔首飾りと腕輪〕の名前を言い、いつだれがそれを身につけたか、どのように所有者が転々と変わってきたか、……などという歴史を語りたがる」(Malinowski [13], 訳, 154ページ。〔 〕内は引用者による補足)のである。

クラとの対比は、貨幣支払いについては市場経済システムの不可逆性や非周期性をいっそう鮮明にしてくれた。現代の市場では後ろを振り返ることはもはや許されず、ただ前進あるのみなのである。しかもその前進は一定速度ではなく、加速的とならざるをえない。なぜなら、市場経済には競争がつきものだからである。市場における競争では、「人々はなるほど競争相手のことを考えに入れはするが、しかし彼の方を向いて彼とコミュニケーションする動機はほとんど持っていない。……経済システムの感受性とその反応速度は非常に本質的なところで、(市場交換が可能にする)相互行為の

節約にかかっている」(Luhmann [10], S.102-103 (訳, 94-95ページ). []内は引用者による補足)。こうして売り手も買い手も義理人情に足を引っ張られることなく競って前へひた走る。大型店の進出が郊外の景観を破壊しようと、回転率重視が書店の棚から良書を駆逐しようと、はたまたインターネット部品調達が下請け中小企業の職人技を廃れさせようと、次第に速度を上げていく彼らの目にはとまらない。なにしろ彼らには、記憶を消してくれる貨幣という強い味方がついているのだから。

一方向の加速的前進は貨幣をメディアとする市場経済システムの宿命とも言える。この前進運動が社会にもたらす利益は無視できないが、最近では負の側面もあらわになってきており、それを「加速危機」と呼ぶ論者もいる¹²⁾。「加速危機」によって社会がどれほど損われるのか、現時点では予測がつかない。確かなことは、限りなく加速していく前進運動は市場経済の宿命ではあっても人間の宿命ではないということである。人間は歩調をゆるめたり、立ち止まったり、逆戻りしたりできるはずである。

注

- 1) 社会システムとしての相互作用と社会 (Gesellschaft) の区別については、村中 [14], 172-173ページ参照。
- 2) 出来事と時間の関係についての要約的な記述は、Baraldi *et al.* [1], S.42-45, および Krause [8], S.103 参照。
- 3) のちの(4節)議論と関連してここで、「活動しないこと」も情報を担いうる」というありふれた、しかし忘れられがちな、事実に注意をうながしたG.ベイトソンの名をあげておこう。Bateson [2], 訳, 456-457ページ。
- 4), 4') この点にかんしては、春日 [5], 11-14ページを参照。
- 5) ルーマンが意思決定は出来事でありシステム要素であるというときのシステムは、組織化された社会システム(=組織)を指しており、支払いの意思決定が問題になっているばあいでも経済システムを指していないことに注意すべきである。[10], S.277(訳, 284ページ)参照。ルーマンにおいては、支払いと支払いの意思決定は一体のものと考えられており(注4参照)、同じ出来事でありながら支払いと見るばあいには経済システムの要素、意思決定と見るばあいには組織という社会システムの要素と、いわば一人二役を演ずるのである。ちなみにルーマンは、「家計」ないし「家族」と「組織」を区別しつつも、しばしば両者をペアにしてとりあげたり、両者の共通点を指摘したりしているから([10], S.104-105(訳, 96-97ページ); [12], S.436), 経済システムの参加システムである「家計」を「企業」とともに、支払いの意思決定を行なう組織のひとつとみなしてもさしつかえないだろう。
- 6) ちなみに、反粒子にかんして注目すべき実験結果を伝えた2000年7月31日付新聞各紙の夕刊記事をみよ。
- 7) この点についてくわしくは、春日 [5], 41-42ページ参照。
- 8) メディアと形態にかんしては、Luhmann [11], Kap.2,I. (S.190-202), [10], Kap.9 (S.302-323(訳, 310-333ページ)), および 春日 [6], 156-159ページ参照。
- 9) Luhmann [10], S.303-313(訳, 311-321ページ)。
- 10) 注6の新聞記事によれば、反粒子が粒子よりもわずかに早く崩壊するという実験結果が得られている。
- 11) 逆プロセスの実行不能を物理の世界で描いた例として、K.ポパーの論文から引用しておこう。「広い水面が最初は静止しているとし、そこに石を一個投げ込んだときの情景を映画に撮ったとしよう。この映画のフィルムを逆に回せば、円環状の波が、振幅をどんどん増しながら収縮してゆくのが見られる。さらに、いちばん高い波頭のすぐ後に、乱れない水面の領域が続く、それが中心に向かって閉じてゆくであろう。これを可能な古典的過程と考えることはできない」(Popper [15], p.538(訳は、Prigogine and Stengers [16] の邦訳338ページによる))。
- 12) Kafka [4], および春日 [7], 7-8ページ参照。

参考文献

- [1] Baraldi, C., G. Corsi and E. Esposito, *GLU Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Suhrkamp, 1997.
- [2] Bateson, G., *Steps to an Ecology of Mind*, Harper & Row, 1972 (佐伯泰樹・佐藤良明・高橋和久訳『精神の生態学』(上, 下)思索社, 1986-7年).
- [3] Haken, H., 「時間の矢—自然界における秩序の崩壊と構築の基礎」服部セイコー編『時間：東と西の対話』河出書房新社, 1988年.
- [4] Kafka, P., “Geld oder Leben? Zur Befreiung der Marktwirtschaft vom Kapitalismus”, in: Müller, F. und M. Müller (Hrsg.), *Markt und Sinn: Dominiert der Markt unsere Werte?*, Campus Verlag, 1996.
- [5] 春日淳一『経済システム：ルーマン理論から見た経済』文真堂, 1996年.
- [6] 春日淳一「社会システムとしての組織」関西大学『経済論集』第47巻第6号, 1998年.
- [7] 春日淳一「市場の意味」関西大学『経済論集』第48巻第3号, 1998年.
- [8] Krause, D., *Luhmann-Lexikon*, 2.Aufl., Ferdinand Enke, 1999.
- [9] Luhmann, N., *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp, 1984 (佐藤勉監訳『社会システム理論』上・下 恒星社厚生閣, 1993-5年).
- [10] Luhmann, N., *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1988 (春日淳一訳『社会の経済』文真堂, 1991年).
- [11] Luhmann, N., *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1997.
- [12] Luhmann, N., *Organisation und Entscheidung*, Westdeutscher Verlag, 2000.
- [13] Malinowski, B., *Argonauts of the Western Pacific*, George Routledge & Sons, 1922 (寺田和夫・増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』中央公論社, 1967年).
- [14] 村中知子『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣, 1996年.
- [15] Popper, K. R., “The Arrow of Time”, *Nature*, Vol.177, 1956.
- [16] Prigogine, I. and I. Stengers, *Order out of Chaos*, Bantam Books, 1984 (伏見康治・伏見譲・松枝秀明訳『混沌からの秩序』みすず書房, 1987年).
- [17] Simmel, G., *Philosophie des Geldes*, 3.Aufl., Duncker & Humblot, 1920 (居安正訳『貨幣の哲学(総合篇)』〔ジンメル著作集3〕白水社, 1978年).
- [18] Sorokin, P. A. and R. K. Merton, “Social Time: A Methodological and Funktional Analysis”, *American Journal of Sociology*, March 1937.